

菩薩は般若波羅蜜に依拠して住す —ヴィマラミトラの『般若心経注』より—

堀内俊郎

本研究はインド・チベットにおける『般若心経』(Prajñāpāramitāhṛdaya、『心経』)注釈文献の総合的解明を目指した一連の論考の一環であり、本稿はヴィマラミトラ(Vimalamitra)による注釈(PHT)の一部を扱う。この文献に対する筆者の問題意識は拙稿[2021b: 53]を参照されたいが、要するに、チベット語訳としてのみ残ることによるテキスト上の難解さゆえに、抜本的な再検討が必要ということである¹。先行訳としてはLopez、談等、大八木があるのでそのうちの二つを適宜脚注に示し、本訳との対比をしておいた。また、同論の校訂テキストはいまだ存在しないので、拙稿同様にチベット語版本3本に基づいて校訂を行い、初めてテキストを提示した。

本稿で扱う範囲はSilk [1994]による『心経』の分段ではP段に相当するが、紙幅の都合でその全部ではない。PHTでのロケーションはD276a7-277b5、P297a2-298b4、T22-25、Lopez, 63-65、大八木, 102-104であり、その範囲で得られた新たな知見は以下の通り。

- ・『心経』P段における viharati (住) という語の主語は従来問題とされてきており、その前にある語も bodhisattvasya や bodhisattvānām など様々な異読があり、PHTによる理解も先行研究によって明らかにされることはなかった。他方、本稿では同じPHT内部での記述や関連文献の精査による読解に基づき、PHTはその前に出る語を単数主格の「菩薩(bodhisattvaḥ)」と読んでおり、これをその主語と理解していることを明らかにした。
- ・PHTの『心経』解釈という広い文脈からいえば、同論は『心経』を菩薩の修行の階梯を説くものと理解するので、この viharati という動詞の主語を菩薩一般と理解したというのは当然のことである。PHTは、『心経』の本箇所を、「それゆえに、(舍利弗よ、)〔般若波羅蜜においてははなかる法も〕得られないので、菩薩は(bodhisattvaḥ)、般若波羅蜜に依拠して、住する」と読んでいたのである。
- ・PHTによる本段の説明をまとめると以下の通り。菩薩(bodhi-sattva)は菩提(bodhi)への意向(sattva)を持つ者として、般若波羅蜜に依拠して菩提を目指し、『解深密経』の説くような菩薩の階梯を登ってゆくのであるが、結果的には般若波羅蜜においても無

1 『心経』、特に小本については最近に至っても注目すべき研究が目立つ。Harimoto [2021] や Acta Asiatica 121 所収の諸論文など。

上正等覚においてもいかなる法も認識されない。すなわち、無上正等覚において何かを得られるというわけではないのである。では菩薩は何のために般若波羅蜜に依拠して住するのか？それは、心の障碍（=『解深密経』の説くような一連の所対治）、顛倒や顛倒による恐れをなくするためである。般若波羅蜜以外に住している者には顛倒があるので、その顛倒によって恐れ、夢の中であがくような無益な活動をするのだが、般若波羅蜜に住する者（菩薩）にはそのような顛倒がなくなるのであり、それこそが涅槃であり、それが般若波羅蜜に住する目的である。

- ・また、本研究では、PHTで引用されている関連文献、特に梵本の存するものを精査して同論の翻訳に活かすという、ごく当たり前だが従来行われていなかった基本的な作業を行ったことにより、多くの箇所で行訳とはいささかの径庭を画すこととなった。

凡例

- ・『心経』のSktには異読が多いが、ここでは、PHTが注釈したであろうSktを提示した。
- ・Sktを（）で囲んだのは、それがPHTでは注釈されていないことを示すためである。これはPHTにその箇所がなかったことを意味しない。PHTは『心経』のほぼ逐語的な注釈であるが、その際、すでに注釈した語を再度注釈しないようである。本稿の範囲でいえば、Śāriputraという語は冒頭部ですでに注釈されている。
- ・A、Bは、チベット語『心経』の二つのリセンションを示す。テキストはSilk [1994]による。

校訂テキストと和訳²

- ・『心経』テキスト

梵本：P: *tasmāc (chāriputra) aprāptitvena bodhisattvaḥ prajñāpāramitām āsṛitya viharati*

Tib A: *shā ri'i bu de lta bas na byang chub sems dpa' rnam thob pa med pa'i phyir/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten cing gnas te/*

Tib B: *shā ri'i bu de lta bas na/ byang chub sems dpa' rnam thob pa med pa'i phyir/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten nas gnas te*

漢訳：是故舍利子。以無所得故。諸菩薩衆。依止般若波羅蜜多³。

- ・PHT, D276a7-277b5, P297a2-298b4, T22-25:

de ltar [ltar] PT; ltar na D) gong du bstan pa'i rnam pas 'di ltar shes rab kyi pha rol tu phyin pa la [D276b] chos gang yang thob pa med pa de'i phyir byang chub kyi ched du sems dpa' (dpa') T; pa DP) dang/ lhag par chags pa dang/ bsam pa gang yin pa de shes rab kyi pha rol tu phyin pa ji skad

2 略号などは拙稿 [2019a] を参照。適宜分節し、『心経』諸本も必要に応じて記載する。

3 便宜的に、チベット語訳から漢訳されたとされる法成訳 (T no. 255) による。

(skad] D; skad du PT) bstan pa'i mtshan nyid bsgom (bsgom] P; sgom DT) pa'i lam dang rab tu ldan pa la rten cing shin tu brten nas brtson 'grus khyad par can gyis [T23] zhugs shing gnas te'o//

「それゆえ」、すなわち⁴、以前に (= 以上で) 説かれた様相 (*prakāra) によって、般若波羅蜜においてはいかなる法も「得られない」ので、それ「ゆえ」、[菩提 (*bodhi)] のための「心 (*sattva)」、[すなわち] 決意 (*adhyavasāya/adhyavasāna)、意向 (*abhiprāya/āśaya) [を持つ] 者 (= 菩薩)、彼は⁵、以上説かれた特質を有し、修道に入った者にとつてのものである⁶ 「般若波羅蜜」[に依って (āśritya)]、すなわち、しっかり依拠して

4 de lta/de lta na: 通常は evam あたりが対応し、直訳すれば、「そのように」、「そのようであれば」であろう。ただ、後の説明や PHT の注釈態度からすれば、これは『心経』の tasmāt (tarhi) に対応する可能性が高い。つまり、『それゆえ』、すなわち、と、PHT が経文を敷衍して説明するという方式である。一字一句をゆるがせにしない PHT が tasmāt という語を注釈しないということは考えにくい。ただ、『心経』の両チベット語訳では tasmāt は de lta bas na と訳されており、それが通常の訳であろうことは気にかかる。また、T 本は『心経』の経文の pratika を指示する際にはその語句の下に丸点を打つのだが、ここではそのようにはしていない。この 2 点がひかかるので、経文とみなさない可能性もある。実際、筆者自身も、拙稿 [2019c: 134] で本 PHT に対する複注的性格を有し、PHT 本文をしばしば引用しているゴク・ロデンシェーラブの『心経』注を扱った際にはそのようになさなかった。しかし、まず、TSD によれば de lta/de lta na で tasmāt の訳でありうるし、また、T 本の判断も絶対的なものではないので、ここでは経文とみておきたい。

5 byang chub kyi ched du sems dpa' (dpa'] T; pa DP) dang/ lhag par chags pa dang/ bsam pa gang yin pa de, *bodhau sattvam adhyavasāya(adhyavasānam) abhiprāyo(āśayo) yasya sa:

これは『心経』の経文に出る bodhi-sattva という複合語への語義解釈であろう。ゆえに、DP の pa は dpa' と訂正されるべきである。なお、後で気づいたのだが、T 本も dpa' と読んでおり、同様に理解している。すなわち、同本は byang chub kyi ched du sems dpa' のうちの byang chub と sems dpa' という語の上に経文であることを示す丸点を打っているのである。炯眼というべきか至極当然の措置というべきか。

ちなみに、筆者がそうしたように、T に依拠せずとも、DP の pa は dpa' と訂正しうる。考え方の筋道は以下の通り。

(I) sems pa のあとに、lhag par chags pa dang/ bsam pa とある。これは並列、列挙か、sems pa の言い換えであろう。その中の bsam pa は、bodhisattva の sattva の言い換えとして他の文献にしばしば登場する。それは、sattva は通常は「有情」を意味するが、bodhisattva の語義解釈という文脈では意向、意図を意味するということを述べるという文脈においてである。すなわち、拙稿 [2020] で挙げたように、他の文献では、

1. VGPV, D ri 297a1-2: mnam pa gcig tu na 'di la byang chub tu sems dpa' yod pa ste/ sems dpa' zhes bya ba'i sgra bsam pa yin pa'i phyir byang chub sems dpa'o//

2. BCAP, 421: tatra sattvam abhiprāyo 'syeti bodhisattvaḥ |

BCAP(t), D la 214b3: de la sems dpa' ni gang gi bsam pa yin pa de la byang chub sems dpa' zhes bya'o//

3. SPT (Vimalamitra 作), D11a4, P14a8-b1: (i) byang chub la'am (ii) byang chub nyid sems dpa' (dpa'] P; pa D) yin pa de dag ni byang chub sems dpa'o//

4. AAA, 22.13-14: bodhau sarvadharmāsaktatāyām svārthasampadi sattvam abhiprāyo yeṣāṃ te bodhisattvāḥ |

AAA(t), D17b7-18a1: byang chub ces bya ba [D18a] chos thams cad la ma chags pa rang gi don phun sum tshogs pa la sems dpa' ste/ bsam pa gang la yod pa de ni byang chub sems dpa' pa'o// とある (略号は同拙稿を参照)。

(II) また、注釈されている『心経』の経句との対応からいえば、直前の箇所では aprāptivena が thob pa med pa de'i phyir として言及されているので、その次に来る経句は bodhisattva のはずである。

(III) さらに、本 PHT 自身にも、前の箇所、(i) 'di'i sems dpa' (dpa'] DT; pa P) ni byang chub kyi ched du'am/ (ii) byang chub sems nyid (sems nyid] DP, nyid T; read nyid sems dpa') yin pas byang chub sems dpa'o// とあった (拙稿 [2019b: n.19])。

(IV) また、上記のうちの 2 例からわかるように、sems pa と sems dpa' はしばしば版本 (D や P) によって異説がある。その 2 例では、sems dpa' がオリジナルで、伝承の過程で sems pa と改変されてしまったのである。

以上のことから、ここでは bodhi-sattva という語に対する語義解釈が行われているということが明らかであるので、sems pa は sems dpa', *sattva と訂正すべきである。この指摘の意義については次注を参照。

6 bsgom (bsgom] P; sgom DT) pa'i lam dang rab tu ldan pa: この表現は samanupaśyati sma に対する解釈に際して引用される『解深密経』にも登場していた (拙稿 [2018: 108, 109])。般若波羅蜜には原因としてのものと結果としてのものがあり、様々な段階があるが (拙稿 [2019b: 173] 参照)、そのうちの修道に入った段階の者 (菩薩) にとっての般若波羅蜜という意味に理解した。

(*samāsritya)、優れた精進によって活動し、「住する」⁷。

byang chub la yang (la yang] PT; la D) chos gang yang yongs su grub pa med do// de skad du **zla**
ba sgron ma'i ting nge 'dzin la sogs pa las/ bcom ldan 'das kyis byang chub kyī rang gi ngo bo
bstan pa/

shin tu phra ba'i chos kyang yod ma yin//

shin tu phra zhes bya ba'ang yod pa min//

(Cf. na dharme 'sti rajomātra |

rajaś cāpi na vidyate || SR, 13.4ab ||

T no. 639, 15.564b1: 法無少塵許 亦無少可得

SR(t), D no.127, da 73a:

7 Lopez, 63: Thus, because of the aspects set forth above, [276b] no qualities are attained in the perfection of wisdom in this way. Therefore, based on and completely based on being endowed thoroughly with the path of meditation, one enters and abides with special effort in the characteristic that is set forth as the so-called perfection of wisdom, that to which one aspires for the sake of enlightenment, which is strongly desired, and which is contemplated.

大八木：そのように前に説いた文によって、このように般若波羅蜜多において法はまた得ることが無いものである。「それなら菩提に対する思いと決心と考えとはどこにあるのか？」〔と云えば〕それは般若波羅蜜多に説かれた相を修する道を、適切に頼って、よく頼って、殊勝な精進によって〔菩提に〕入ってとどまる〔ことである〕。(102)

先行訳は構文理解として首肯できない。テキストに対する下線で明らかなように、この箇所は、経文を逐語的に引き、軽い語釈を加えたものとみるのが妥当。なお、大八木氏は gang をいつものごとく疑問詞と理解しているが、誤り。

ところで、梵本（大本・小本ともに）『心経』の viharati（住する）という動詞の主語については議論があり、「人」、「菩薩」、あまつさえ「聖観自在菩薩」とする意見もある（原田 [2009: 278-279]）。また、前に出る語は bodhisattvānām や bodhisattvasya と、単数もしくは複数の属格であり、チベット語訳には byang chub sems dpa' rnam とあり、これも議論となる箇所である。

他方、今回の筆者の訳によれば、PHT はここを単数主格の「菩薩 bodhisattvaḥ」としており、これを viharati の主語と理解していることになる（Lopez 訳は one（人）、大八木訳は意味不明）。ここを同様に単数主格とする写本としては、mahāsattvaḥ（摩訶薩）という語が加わっているが、たとえば、白石氏の提示する『心経』テキストの 5 と 6 がある（白石 [1988: 523]）。ただし白石氏自身は、複数属格の bodhisattvānām が「正しい」としている（同 546.n.3）。さらに、小本『心経』についてであるが、米澤 [2009: 199ff.] は、bodhisattvasya という梵本に対し *bodhisattvas yaḥ という訂正案を提示しており、Saito [2021: 14] は英訳で [a bodhisattva] と主語を補っている（[a bodhisattva] dwells relying on the Perfection of Wisdom of bodhisattvas）。

大本については Attwood [2018] が、Conze 1967 の bodhisattvo という sandhi の誤記（Conze [1948] では bodhisattvasya）を訂正し、単数主格の bodhisattvaḥ (bodhisattvaḥ) を提案しており、Saito [2021: 16] も bodhisattva mahāsattvaḥ を採用している。それらは単数の菩薩（・摩訶薩）を主語とみているのである。なお、渡辺 [2009: 31] は、翻訳としては「諸菩薩は」としている（同書は大本について中村校訂本と渡辺校訂本を提示している。当該箇所は前者では bodhisattvānām であり後者では bodhisattvasya であるが、和訳は同じである）

なお、本研究の主眼は大本『心経』に対するヴィマラミトラの注釈の解明にあるので小本についての解説書に言及する必要はないが、宮坂 [2004] は「本段は『菩提薩埵は菩提薩埵の般若波羅蜜多によって』と主語を補って読めばよい」と言う（第六章）。

さて、PHT の『心経』解釈という点からすれば、PHT は『心経』を菩薩の修行の階梯を説くものと理解するのであるから、同論が『心経』のこの viharati の主語を菩薩一般と理解したというのは当然のことである。PHT は、『心経』の本箇所を、「それゆえに、（舍利弗よ、）〔般若波羅蜜多においてはいなかる法も〕得られないので、菩薩は、般若波羅蜜多に依拠して、住する」と読んでいたということである。また、ここで「菩薩 (bodhisattva)」という語をこのように語義解釈したのは、次の段落で「菩提 (bodhi) においても」云々と述べ、さらには対論者からの論難を引き出し、中観派による菩提や無上正等覚に対する理解を開示するという目的を持っているものと考えられる。注 12、31 を参照。

chos ni rdul tsam yod med de//

rdul ces bya ba'ang yod ma yin//)

Rim gyis, D343a7-b1, P400b7-8: de skad du **zla ba sgron ma'i ting nge 'dzin** las kyang bcom
ldan 'das kyis byang chub kyī rang gi ngo bo bstan pa/

shin tu phra [D343b] ba'i chos kyang yod ma yin//

shin tu phra zhes bya ba'ang yod ma yin//

zhes gsungs so//)

zhes bya ba la sogs pa dang/

菩提においても⁸、いかなる法も成立していないのである。すなわち、『月灯三昧経』などで、世尊によって菩提の自性が説かれている⁹。

「極めて微細な法も存在しない（微塵ほどの法も存在しない）。“極めて微細（微塵）”ということも存在しない」

云々とあるのと、

rnam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa las kyang/

gsang ba'i (ba'ij) D; ba pa'i PT) bdag po de na (na] DT; ni P) shin tu phra ba'i chos kyang
yod pa ma yin zhing dmigs su med de/ (de/] DP; do// T) des (des] PT; de D) na bla na med pa
yang dag par rdzogs pa'i byang chub ces bya'o

(MVA, D153a5-6; P117b1: de yang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub po//

gsang ba'i bdag po/ de la ni chos rdul tsam yang med cing mi dmigs so//

T no. 848, 18.1c2-3: 祕密主是阿耨多羅三藐三菩提。乃至彼法。少分無有可得。

Rim gyis, D343a6-7, P400b6-7: yang gsungs pa/

gsang ba'i bdag po shin tu phra ba'i chos kyang yod pa ma yin zhing dmigs su med do//

des na bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub ces bya'o

zhes gsungs so//)

zhes gsungs so//

『Vairocanābhisambodhi (大日経)』にも、

「秘密主よ、そこ（菩提）においては極めて微細な法も存在せず、認識されない。そ

8 Lopez 訳は yang を欠く D を採っているが、P (T も) を採用すべきである (大八木訳は段落分けをしていない点是不適切であるが D を採用した点では正しい)。これは、直後の、「般若波羅蜜と無上正等覺においていかなる法も存在しないならば」という記述と対応するからである。

9 Lopez, 63: As the *Candrapradīpasamādhi* says, “The Bhagavan sets forth enlightenment's own entity; it lacks even very subtle qualities. What is called 'very subtle' does not even exist.”

大八木：『月灯三昧経』等に、

「世尊によって菩提の自性が説かれた… (102)

大八木氏が出典を比定した『三昧王経』(大八木 [2002: fn.23] では梵本対応箇所も指示している) と比較すれば、同訳を含めた先行訳の理解する引用範囲は誤り。また、この偈は上記の通り Rim gyis にも引かれる。テキストはほぼ同じ (pāda d のみ、yod ma yin と、異なっている)。

れゆえ、無上正等覺と言われる¹⁰]

と説かれている。

[Q] ci (ci) DP; ji¹¹ T) ste shes rab kyi pha rol tu phyin pa dang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub la chos 'ga' yang med na skyon gyi mtshan nyid kyi chos bsal nas ye shes su gyur pa yang gang yang med/ yon tan gyi mtshan nyid 'dod pa thob pa yang med na (na] PT; ce na D) ci'i phyir byang chub las (las] DP; la T) brtsams te shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten nas gnas pa (gnas pa] DP; gnas T) 'di snyam du sems te/ ji tsam du kha cig gi (gi] DT; gis P) re ba sngon du btang (btang] DP; song T) ba ni 'ga' zhid la 'jug par byed de/ de thams cad ni mi 'dod pa'i skyon spangs pa'i (spangs pa'i] DP; spang ba'i T) phyir dang/ ^{IP297b1} 'dod pa'i yon tan thob par bya ba'i phyir 'jug go// gang du yang rang gi ngo bo stong pa yin pa'i phyir chos thams cad mi dmigs na (na] DP; pa T) de la (la] DP; la ni T) su zhid 'jug/ ci'i phyir 'jug/ 'jug pa'i 'bras bu (bu] DP; bu yang T) ci yin zhe na/

【問い】〔もし君（ヴィマラミトラ）が言うように〕“般若波羅蜜と無上正等覺（*anuttara-samyaksambodhi）においていかなる法も存在しない”ならば、(a) 過失を特徴とする法を取り除いてから智となるものも何も存在せず、(b) 美德を特徴〔とする〕望まれた〔法〕の獲得もないことになるが、どうして菩提のために（*ārabhya）般若波羅蜜に依拠して（ā√sri）住する者が、そのように考えるであろうか？〔いや、考えない。〕すなわち、〔通常、〕ある人々にとって、望みが前提となっている限り、〔その限り、その人々は〕何かあるものへと向けて活動するのである。つまり、〔彼ら〕一切は、(a') 好ましくない過失を断ずるためと、(b') 望まれた功德を得るために、活動するのである¹²。〔しかしながら、〕

10 大八木 [2002: (29)ff.] が出典を比定し、『大日経』の藏・漢訳を挙げて検討している。なお、本箇所は上記の通り Rim gyis にも引かれる（PHT とほぼ同一であるが de na という語のみを欠く）。その際、同論ではこちらが『三昧王経』よりも先に引かれている。

11 本 PHT に対する複注的性格を有するゴク・ロデンシェーラプの『心経』注は ji とする（拙稿 [2019c: 135]）が、ここでは DP の ci を採用しておく。

12 Lopez, 64: Question: But if the perfection of wisdom and unsurpassed, perfect, complete enlightenment have no qualities whatsoever, then the wisdom that comes about through eliminating qualities that have the character of fault also does not exist at all. If the attainment of the desired characteristic of good qualities does not exist, why do [bodhisattvas], beginning with [the wish for] enlightenment, depend on and abide in the perfection of wisdom? One enters into something to the extent that one has a prior hope; they all enter [the path] in order to abandon the faults they do not wish for and in order to attain the good qualities they wish for. Since anything is empty of its own entity, if all phenomena are unobservable, who is it that enters that? Why do they enter? What is the fruition of entering?

Answer: ...

大八木：「なぜ般若波羅蜜多と無上正等覺にわずかな法も無いのか」と言えば、誤った相の現象を取り除いて智慧となるものも無いからである。「欲された功德の相が得られないならば、何のために菩提〔心〕から始め、般若波羅蜜多に頼って〔そこに〕とどまるのか？」〔という〕この思いをなしたとしても、あるものは前に望んだものを遠離したその時に入り、そして彼らは皆欲さない誤りを離れるためと、欲する功德を得るためにとどまったのである。

「何であれ、自性は空であることですべての法が不可得ならば、そこに誰が入るのか？なぜ入るのか？入った結果は何か？」と言うならば (102)

難解だが、背景にある基本的な考えを一言でいえば以下の通りであろう。人が活動するのは (a) (b) という二つの目的があつてのことである。だが、般若波羅蜜と無上正等覺においていかなる法も存在し

自性が空であるから一切法が認識されないようなところ、そのようなところへと、(i) 誰が活動し、(ii) なぜ活動するのか、〔そして、〕(iii) 活動の結果は何か？

『心経』梵本：cittāvaraṇanāstitvād atrasto viparyāsātīkrānta-

Tib A: sems la sgrib pa med pas skrag pa med de/ phyin ci log las shin tu 'das nas

Tib B: sems kyi sgrib pa med pas 'jigs pa med cing/ phyin ci log las 'das te/

漢訳：心無障礙。無有恐怖。超過顛倒。)

[A] sems kyi sgrib pa med pas zhes bya ba la sogs pa gsungs te/ yang dag pa'i don ji lta ba bzhin du yongs su shes pa la gags (gags) DPT; *read gegs/'gags*) byed pa'i phyir sems la sgrib par byed kun nas khebs par byed pa'i phyir sems kyi sgrib pa'o// de dag kyang gang zag dang chos la mngon par zhen pa la sogs pa shin tu rmongs pa nyi shu rtsa gnyis dang de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs bcu gcig go//

【答え】「心の障碍がないので¹³」云々と説かれている。正しい意味を如実に遍知することを妨げるために「心」を「障碍する (ā√vr)」、〔つまり、〕あまねく覆うので、「心の障碍 (āvaraṇa)」である。それらはまた、人と法への執着などという二十二種の愚昧さと、その十一の龜重 (dauṣṭhulya) という、所対治 (*vipakṣa、敵対するもの、対治されるべきもの) である¹⁴。

gang dag spang ba'i phyir 'joms pa'i don gyi (gyi) D; gyis PT) gnyen po ni go rims (rims) DT; rim

P) bzhin du rab tu dga' ba la sogs pa sa bcu gcig ste/ sa^{1D277a]} la^[T24] 'jug pa las ji skad du/

yan lag bcu gcig rdzogs pa yis//

ないならば、(a) (b) 両方とも得られないことになる。にもかかわらず菩薩はなぜそれに向けて活動するのか、ということ。回答は以下でひとまず与えられているが『解深密経』の引用もあり脈絡が読みづらいのでク・ロデンシェーラプによる本 PHT に対する注 (注 11 を参照) の説明を借りれば、「般若波羅蜜もしくは無上正等覚を正しく存在するものとして得ることが努力の結果なのではない。そうではなくて、顛倒を断ずることのみが、その結果なのである。すなわち、正しく成立していない法を諦として執着すること (諦執) が断じられる、ということである」(拙稿 [2019c: 135])、ということ。なお、より詳細な回答は、先行訳は明示しないが、Silk 分段での Q 段の末尾あたりで与えられる。

筆者の訳も暫定的なものであるが、少なくとも最後の文に関して、先行訳は gang du ... de la の対応に気づいておらず不適切。gang du は、先に出ていた「般若波羅蜜と無上正等覚」を指す。なお、本箇所は確かに難解だが、大八木訳は極めて理解しがたい。

13 viharaty acittāvaraṇaḥ | cittāvaraṇanāstitvād と続くテキストが広く採用されているが、Conze [1967: 152, fn.40] は、acittāvaraṇaḥ を欠く写本を 7 つ紹介しており、また、チベット語訳も同様であることを指摘している (実際、チベット語訳では gnas te(/) sems la sgrib pa med pas である)。本 PHT においても acittāvaraṇaḥ に対応する語は存在せず (少なくとも注釈されておらず)、ここから想定される梵本は、*viharati/ cittāvaraṇanāstitvād ... である。

14 Lopez, 64: There are the twenty-two obscurations (*saṃmoha*), such as attachment to persons and phenomena, and eleven discordant assumptions of bad states (*dauṣṭhulya*).

大八木：それらはまた人と現象に対する執着等の二十二の妄想とその十一の過失を支持しないものである。(102)

mi mthun pa'i phyogs の位置が厄介であるが、あとでの『解深密経』の引用との対比で理解してみた。なお、大八木訳の「過失を支持しないもの」だと、意味が真逆になる。

rab dga' la sogs bcu gcig sa//
 rmongs gnyis gnas ngan len gcig ste//
 mi mthun phyogs ni tha dad do//

それら（所対治＝障碍）を断ずるために破壊する意味での対治（治療、pratipakṣa）が、順に、歓喜（pramuditā）などの十一地である。『入地』¹⁵に、

「十一支分（*aṅga）を完成する（*√pṛ）ことによって、歓喜などの十一地がある。
 [それぞれの地に] 二つの愚昧（*saṃmoha）と一つの籠重（*dauṣṭhulya）があって、
 所対治（*vipakṣa）は [それぞれの地で] 異なっている¹⁶」

15 sa la 'jug pa、『入地』：

Lopez氏はBhūmi-avatāra[?]と梵本を想定するのみ。他方、大八木、118, n.77は、「いずれの文献のことかは不明」とするが、ダルマミトラのAbhisamayālamkārikākārikāprajñāpāramitopadeśasāstraṅkā Prasphuṭapadā, D no. 3796, 53b7にも同じ文があるという重要な指摘をし、「同書からの引用とも考えうる」と指摘している。たしかに同書ではD nya 53b6-54a1, G (no. 3193) nya 71a5-b1:

sa rnam kyī mi mthun pa'i phyogs bye brag can 'di ni bdag gis (gis] G; gi D) sa la 'jug pa las/
 yan lag bcu gcig rdzogs gyur pas//
 rab tu dga' sogs sa bcu gcig//
 rmongs gnyis gnas ngan len gcig ste//
 mi mthun phyogs de tha dad do//

zhes bshad pa'i lugs [G71b] kyis 'phags pa ('phags pa] D: 'phags G) dgongs pa nges par 'grel pa zhes bya ba theg pa chen po'i lung [D54a] gis bshad pa'o//

「この、区別を伴った諸の地の所対治は、私によって、『*Bhūmy-avatāra』で、「(引用箇所中略)」と説明された流儀に基づいて、『聖解深密〔経〕』という大乘のアーガマによって、説明されたのである」とある。

なお、同文献では、この引用の前には『解深密経』が引用され、各地における所対治が説明されている。さて、ここで、bdag gisは、二つのbshad paのうち後にはのみ係るか、両方にかかるか。後者の場合、私によって『入地』で説かれたとなり、同論はダルマミトラその人の著作ということになる（Dを採用してbdag gi（私の）とすれば、なおさらそうである）。他方、後のbshadにのみ係るとすれば、ダルマミトラは『入地』に基づいて『解深密経』を解説したというあたりの意味となり、同論の著者問題とは関係がないということになる。このPrasphuṭapadāは、磯田 [1977: 350-354] によって概観されているが、ここでは氏は「私が、『Sa la 'jug-pa』の「…」と説く見解に基づいて、…大乘の阿含によって説明した」(352)と訳しており（…は引用者による中略）、前者で理解しているようである。とすれば、『入地』はDharmamitraが引用しているだけということになる。年代的にみてもDharmamitraは800年以降とされるので（磯田同上351）、797-810年に入蔵してその期間に本PHTを書いたとされる（Lopez, 9）ヴィマラミトラが引用できたかどうか。以上のことから、『入地』は出典は不明であるものの、ダルマミトラも引用する文献であるとのみしておきたい。

なお、Gruber [2016] が指摘するように、同論の別の個所は、SPTにも引かれる。

SPT: D ma 29b1:

de skad du sa la 'jug pa las kyang/
 sa lnga gnyis dang gsum dag la//
 nyon mongs grogs dang nyam chung dang//
 phra ba zad pa'i 'dod pa yin//
 de bzhin gshegs pa de dag zad//
 ces gsungs so//

ここでは同論が'byungやbshadではなく〔尊敬形の〕gsungsとして引用されていることと、ここも韻文であるという2点を指摘しておきたい。

16 Lopez, 64: “Through collecting the eleven branches, there are eleven stages, such as the Joyous. The [twenty-] two obscurations and [ten plus] one assumptions of bad states, the discordant class, are different.”

大八木：「十一支を円満することによって歓喜等の十一地〔となる。〕二つの妄想と一の過失であり、支持しないものは異なる」(103)

Lopez氏は余計な補いをしており、また、rdzogsをcollectingと訳すのも誤り。大八木氏は必要な補いをせず、また、先と同様、「支持しないもの」という不可解な訳をしている。

Cf. 松田 [1995: 68] : sa tenāmgēna paripūrṇo bhavati (SNS)

と出ており、同様に、『解深密〔経〕』にも¹⁷、

zhes 'byung ba dang/ de bzhin du **dgongs pa nges par 'grel pa** las kyang/

de la (1) sa dang po la (po la] DP; po T) gang zag dang chos la mngon par zhen pa'i shin tu rmongs pa dang/ ngan song ba'i nyon mongs pa'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// (2) gnyis pa la ni ltung ba phra mo'i (mo'i] DT; ma'i P) 'khrul pa'i shin tu rmongs pa dang/ las kyi 'gro ba rnam pa (rnam pa] DP; φ T) sna tshogs la shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// (3) gsum pa la ni 'dod pa'i 'dod chags kyi (kyi] DP; kyis T) shin tu rmongs pa dang/ thos pa'i gzungs yongs su (su] P; su ma DT) rdzogs pa'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// (4) bzhi pa la ni snyoms par 'jug pa la sred pa'i shin tu rmongs pa dang/ chos la sred pa'i shin tu ^[P298a] rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len (len] DT; len ni P) mi mthun pa'i phyogs so// (5) lnga pa la ni 'khor ba las shin tu phyir phyogs pa dang mngon du phyogs pa (pa] DP; pa'i T) yid la byed pa'i shin tu rmongs pa dang/ mya ngan las 'das pa las phyir phyogs pa dang/ mngon du phyogs pa (pa] DP; pa'i T) yid la byed pa'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// (6) drug pa la ni 'du byed 'byung ('byung] DT; byung P) ba mngon sum (sum] D; φ PT) gyur pa'i shin tu rmongs pa dang/ mtshan ma mang du 'byung ba'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so//

(松田 1995: 69-70: § 5-1. prathamāyā bhūmeḥ pudgaladharmābhiniveśasamṃmohaḥ āpāyikasamkleśasamṃmoha(s tad)dauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-2. dvitīyāyāḥ sūksmāpattiskhalitasamṃmoha(ś) citrākāraḥ karmagatisamṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-3. tṛtīyāyāḥ kāmarāgasamṃmohaḥ pratipūrṇaśrutadhāraṇīsamṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaś (/) SNS: § 5-4. caturthyāḥ samāpattitṣṇāsamṃmohaḥ dharmatṣṇāsamṃmohaḥ (tad)dauṣṭhulyaṃ ca (vipakṣaḥ /) § 5-5. pañcamyāḥ saṃsāraikānta-vimukhatā-manaskārasamṃmohaḥ nirvāṇaikāntābhimukhatā-manaskārasamṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-6. ṣaṣṭhyā(h) saṃskārānupravṛttipratyakṣasamṃmohaḥ nimittabahulasamudācārasamṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/)

『解深密経』：謂於初地、有二愚癡。一者執著補特伽羅及法愚癡。二者惡趣雜染愚癡。及彼龜重、爲所對治。於第二地、有二愚癡。一者微細誤犯愚癡。二者種種業趣愚癡。及彼龜重、爲所對治。於第三地、有二愚癡。一者欲貪愚癡。二者圓滿聞持陀

17 Lopez氏が Powers氏の『解深密経』英訳のロケーションを指示し、談等と大八木氏が玄奘訳のテキストを指示しているように、SNS, IX.5、玄奘訳: T16.704b7-c2が典拠。ただ、先行訳は指摘しないが (Lopez訳は1994年刊行なので仕方がない)、本箇所は松田 [1995]により校訂梵本 (69-70)と和訳 (74-75)が提示され、梵本が得られる箇所であるので、それと対比することによって読みが明瞭になる箇所が存在する。さらなる書誌は一郷 [2002: 49, fn.220]も参照。

羅尼愚癡。及彼匱重、爲所對治。於第四地、有二愚癡。一者等至愛愚癡。二者法愛愚癡。及彼匱重、爲所對治。於第五地、有二愚癡。一者一向作意棄背生死愚癡。二者一向作意趣向涅槃愚癡。及彼匱重、爲所對治。於第六地、有二愚癡。一者現前觀察諸行流轉愚癡。二者相多現行愚癡。及彼匱重、爲所對治。)

そのなか、初地では¹⁸、人と法への執着という愚昧と、悪趣をもたらず雑染¹⁹という愚昧と、それら〔二つの〕匱重が、所対治である²⁰。第二〔地〕では、微細な罪を犯すという愚昧と、種々な様相を有する業の行く先〔に關する〕愚昧と、その匱重が、所対治である。第三〔地〕では、欲貪という愚昧と、完全な聞持陀羅尼（聞いたことの保持）〔への〕愚昧と、その匱重が、所対治である。第四〔地〕では、〔入〕定を渴愛するという愚昧と、〔教〕法を渴愛する²¹という愚昧と、その匱重が、所対治である。第五〔地〕では、輪廻に一向に背を向け、〔また、〕向かうことを作意するという愚昧と、涅槃に〔一向に〕背を向け、〔また〕向かうことを作意するという愚昧²²と、その匱重が、所対治である。第六〔地〕では、行（形成力）の展開を直接知覚するという愚昧と、多くの因相（nimitta）の現行という愚昧と、その匱重が、所対治である。

(7) bdun pa la ni mtshan ma phra mo 'byung ba'i shin tu rmongs pa dang/ rab tu mtshan ma med pa yid la byed pa'i thabs la shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so//

(8) brgyad pa la ni mtshan ma med pa la bsgrim (bsgrim] D; sgrim PT) pa'i shin tu rmongs pa

18 梵本では Genitive であり所属の属格でもよかるうが、チベット語訳、漢訳では Locative であるので、意味上、それに基づいた。

19 前出の「(7) 不滅・(8) 不増」の説明中にも出ていた語。当該箇所を参照。

20 Lopez, 64: From that, on the first, there is the obscuration of adherence to persons and phenomena and the obscuration of the afflictions of the bad transmigrations and the discordant class of assuming their bad states.

大八木：そこで、初地においては人と現象に執着する妄想と、悪趣の煩惱の妄想と、その過失とが所対治である。(103)

Lopez 氏の構文理解は誤り。わざわざ記さないが、以下でも同様である。大八木訳は特に「悪趣の煩惱の妄想」という訳が誤りであるが、その点については妥当。

なお、「それら〔二つの〕匱重」と訳したが、梵本では tad-dauṣṭhulyam で tad が複合語の前分にあるので数はここからはわからない（チベット語訳の de'i も単数・両数・複数でありうる）。

21 「法愛」については、一郷 [2011: 51, fn.227] が、Madhyāntavibhāga, 35.17-18, MAVI, 102.17-103.2 を参照せよとする。法にはさまざまな語義があるが、そこでは一つの解釈として、「経などの法への渴愛 (sūtrādidharmatrṣṇā)」とされる。

22 諸本に異説がある。チベット語諸本では、輪廻に背を向け・向かうことと、涅槃に背を向け・向かうこと。梵本と漢訳では、輪廻に背を向け、涅槃に向かうこと、となっている。なお、PHT の shin tu は、ati- などの訳である可能性もあるが、諸本との比較からは、ekānta- の訳とみてよい。ただ、次の (7) では rab tu がこれに対応しているので、揺れがある。

PHT: 'khor ba las shin tu phyr phyogs pa dang mngon du phyogs pa (pa] DP; pa'i T) (*vimukhābhimukha) yid la byed pa'i shin tu rmongs pa dang/ mya ngan las 'das pa las phyr phyogs pa dang/ mngon du phyogs pa (pa] DP; pa'i T) yid la byed pa'i shin tu rmongs pa

SNS: 'khor ba la gcig tu mi phyogs pa nyid dang/ mngon du phyogs pa nyid yid la byed pa kun tu rmongs pa dang/ mya ngan las 'das pa la gcig tu mi phyogs pa nyid dang/ mngon du phyogs pa nyid yid la byed pa kun tu rmongs pa

SNS(Skt): samsāraikānta-vimukhatā-manaskārasaṃmoho nirvāṇaikāntābhimukhatā-manaskārasaṃmohas

『解深密経』：一者一向作意棄背生死愚癡。二者一向作意趣向涅槃愚癡。

Cf. BK, I, 226.8-9: samsārā[na]bhimukhaṃ nirvāṇābhimukhaṃ (Tucci は [na] を補うが、そうせずに samsāravimukhaṃ とする可能性もあろう。Tib. 'khor ba la mi phyogs pa.)

dang/ mtshan ma dag la dbang ba'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// ^[1725] (9) dgu pa la ni chos bstan pa tshad med pa dang/ chos kyi tshig dang yi ge tshad med pa dang/ gong nas gong du shes rab dang spobs pa la gzungs kyi dbang gi shin tu rmongs pa dang/ ^[1277b] spobs pa la dbang gi shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// (10) bcu pa la ni mngon par shes pa chen po'i shin tu rmongs pa dang/ gsang ba phra mo la 'jug pa'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so// (11) sangs rgyas kyi sa la ni shes bya thams cad la rab tu phra ba'i chags pa'i shin tu rmongs pa dang/ thogs pa'i shin tu rmongs pa dang/ de'i gnas ngan len mi mthun pa'i phyogs so

zhes gsungs te/

(SNS: § 5-7. saptamyāḥ sūkṣmanimittasamudācārasaṃmohaḥ ekāmtānimittamanasikāro-pāyasamṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-8. aṣṭamyā animi[ttābho]gasamṃmohaḥ nimitteṣu ca vaśitāsaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-9. navamyā apa[ri]-(māṇa)dharmadeśanāyāṃ aparimāṇe dharmapadavyaṃjane uttarottare ca prajñāpratibhāne dhāraṇīvaśitāsaṃmohaḥ pratibhānavaśitāsaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-10. daśamyā mahābhijñāsaṃmohaḥ sūkṣmaguhyānupraveśasaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5-11. buddhabhūmeḥ sarvasmin jñeye* susūkṣmasaktisaṃmohaḥ pratighātaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/)

*jñāye を、写本（松田 1995: 64 と 65 の間に提示されている）に基づき jñeye と修正する。

『解深密經』：於第七地、有二愚癡。一者微細相現行愚癡。二者一向無相作意方便愚癡。及彼龜重、爲所對治。於第八地、有二愚癡。一者於無相作功用愚癡。二者於相自在愚癡。及彼龜重、爲所對治。於第九地、有二愚癡。一者於無量說法無量法句文字後後慧辯陀羅尼自在愚癡。二者辯才自在愚癡。及彼龜重、爲所對治。於第十地、有二愚癡。一者大神通愚癡。二者悟入微細祕密愚癡。及彼龜重、爲所對治。於如來地、有二愚癡。一者於一切所知境界極微細著愚癡。二者極微細礙愚癡。及彼龜重、爲所對治。

第七〔地〕では、微細な因相が現行するという愚昧と、一向に無相を作意する方法に関する愚昧と、その龜重が、所対治である。第八〔地〕では、無相へと努力するという愚昧²³と、諸の因相に対する自在という愚昧と、その龜重が、所対治である。第九〔地〕では、無限なる説法と、無限なる法の句と文字と、より上である智慧と弁才（ひらめき）についての、陀羅尼の自在に関する愚昧と、弁才の自在に関する愚昧と、

23 Lopez, 65: the obscuration of fixating on signlessness

大八木：無相を想像する妄想（103）

Lopez 訳の fixating の語感によくわからないが、bsgrim は常識的にいって ābhoga の訳で、人為的努力の意。漢訳ではしばしば「功用」と訳されるもの。無功用の反対。

その龐重が、所対治である。第十〔地〕では、大神通〔に関する〕愚昧と、微細な秘密に参入する〔ことへの〕愚昧と、その龐重が、所対治である。仏地では、一切の知られるべき事柄に対しての極めて微細な執着という愚昧と、妨げという愚昧と、その龐重が、所対治である」

と説かれている。

de dag med pa'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin pa la gnas pa la (la] D; na PT) 'jigs pa med de mi skrag go// shes rab kyi pha rol tu ^{IP298b]} phyin pa las gzhan du gnas pa la (la] DP; las T) ni phyin ci log des 'jigs te/ phyin ci log las (des 'jigs te/ phyin ci log las T; las D; des 'jigs te phyin ci log P) 'jigs pa yin no zhes bstan to// 'di skad bstan (bstan] DP; ston T) te/ sems phyin ci log pa ni 'jug pa yin no zhes bya'o//

それら（心の障碍 = 所対治）が「存在しないから（-nāstivāt²⁴）」、般若波羅蜜に住している者には（/時には）²⁵「恐れがない（atrasta）」、つまり、恐怖しないのである²⁶。一方〔、逆にいえば、〕“般若波羅蜜以外に住している者は（/時には）、その顛倒によって恐れる。すなわち、顛倒に基づいて恐れるのである”、と説かれたのである。〔すなわち、〕以下のように説かれたことになる。“心が顛倒している者は活動する（'jug pa）のだ”と²⁷。

de (de] DP; ji T) skad du tshad ma rnam 'grel las/

log par sgro 'dogs spang ba'i phyir//

grol ba po ni med kyang brtson//

24 med pa'i phyir: T 本は経文であることを示す丸点を付しておらず、本 PHT 前箇所や『心経』チベット語訳でも med pas となっているが、文脈的に経文の -nāstivāt に対応しよう。

25 pa la(D)/pa na(PT)の異読がある。一般的には pa la は「～の者には」、pa na は「～の時には」を意味しようが、逆も可能であろう。まず異読の処理については、次の一文には DP ともに pa la とあるので、ここでも D に基づいて pa la を採用した。意味であるが、以下での『十地経』の引用直後には同じ構文で pa ni とあり、その場合、「般若波羅蜜に住している者は」と、主語として訳される。これが一番良い理解に思われるので、ここでもそのように理解した。むろん、その「者」とは、菩薩を指す。

26 Lopez, 65: It is taught that because those do not exist, one who abides in the perfection of wisdom is without fear, that is, without fright.

大八木：すなわち、それら（所対治）が存在しないので般若波羅蜜多に頼る者は無畏であり恐怖が無いのである（103）

先行訳はそのように理解していないが、ここは経文を補いつつ解釈したものとみられる。

27 異読の全貌は以下の通り。先行訳は P を採用したのであろう。ここでは T を採用した。

D: phyin ci log las 'jigs pa yin no（顛倒により恐れるのである）

P: phyin ci log des 'jigs te phyin ci log 'jigs pa yin no（その顛倒によって恐れる。すなわち、顛倒は恐怖である）

T: phyin ci log des 'jigs te/ phyin ci log las 'jigs pa yin no（その顛倒によって恐れる。すなわち、顛倒に基づいて恐れるのである）

Lopez, 65: One who abides in that which is other than the perfection of wisdom is frightened by error; error is frightening. This is taught: mental error is entry.

大八木：般若波羅蜜以外に頼る者についてはその誤りによって恐怖する。すなわち「誤りは恐ろしいものである」と説かれたのである。このように説いて「誤った心は入ることである」というのである（103）

'jug pa や zhugs pa とあれば「入る、enter」などと機械的に訳しておればよいというものではない。大八木訳の「誤った心は入ることである」は意味不明。以下の引用文から判断すれば、'jug pa は活動 activity、より具体的には、夢の中でもがくような無益な活動を意味する。

(mithyādhyāropahānārtham |

yatno 'saty api moktari || (PV, 2.192cd))²⁸

zhes bstan to//

『量評釈 (プラマーナ・ヴァールッティカ)』に、

「解脱者はいなくとも、誤った増益 (過剰な存在付託) を断ずるために、努力 [がなされる]²⁹」

と説かれている。

phyin ci log med pa ni 'jug pa med de/ **sa bcu pa** las de skad du sa brgyad pa la mi skye ba'i chos
la bzod pa thob pa na rmi lam na chus khyer ba rmis pa'i skyes bu sad pa'i tshe chu las thar bar bya
ba'i 'bad pa chen po log pa'i dpe dang

de nyid de'i mya ngan las 'das pa yin no

zhes bya ba la sogs pa (pa] D; pas PT) bstan te/ (te/] D; to// PT) 'dir yang shes rab kyi pha rol tu
phyin pa la gnas pa ni phyin ci log rang gi rmongs pa ji lta ba las 'das pa ste (pa ste/] DP; pas te T)/
shin tu song ba ni phyin ci log las 'das pa'o//

〔逆に、〕顛倒がない者は活動しない³⁰。すなわち、『十地〔経〕』に、第八地において無
生法忍 (*anutpattikadharmakṣānti) を得た時に、“夢の中で水に流された眠っている人が、
〔のちに〕目覚めた時に、水から解放される (=水を渡る) ための〔夢の中での〕大いなる
努力は誤りであった〔ことに気づく〕”という譬えと、

「まさにそれこそが彼にとっての涅槃である」

云々と〔いうことが〕説かれている³¹。ここ (『心経]) でも、般若波羅蜜に住している者

28 Lopez 氏比定。木村 [1981: 155] に和訳と梵本あり。'saty api moktari について木村氏は「解脱者とい
うものでなくても」と訳すが、Pecchia [2010: 52] は「even if there is not an agent of liberation」と訳す。
後者に賛同する。

29 Lopez, 65: “In order to abandon erroneous superimpositions, the liberator makes effort, although they do not exist.”

Lopez 訳は構文理解を誤っている。すでに解脱した人が努力をするということではない。

30 'jug pa med: ここには、『心経』に説かれる viharati, gnas (住する) と、'jug pa (活動する) という語と
の対比が看取される。viharati は「除く」という意味に理解されることもあったが(白石[1988: 504])、チベット
語訳や PHT の理解では「住する」である。そして、住するのはどこにかというと、般若波羅蜜にである。
本稿の範囲内での 4 例を順に挙げておく。

• shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten nas gnas pa (gnas pa] DP; gnas T)

• shes rab kyi pha rol tu phyin pa la gnas pa

• shes rab kyi pha rol tu [P298b] phyin pa las gzhan du gnas pa

• shes rab kyi pha rol tu phyin pa la gnas pa

そして、般若波羅蜜に住している者は、顛倒による恐怖がないから、活動をしないのである。次注も参照。

• phyin ci log med pa ni 'jug pa med de. Cf. sems phyin ci log pa ni 'jug pa yin no.

31 Lopez, 65: Without error, there is no entry; as it is taught in the *Daśabhūmika* (Ten Stages), “When, on the eighth
stage, one attains forbearance of the nonproduction of phenomena, [it is like] when a person awakens from a dream
of being carried away by water; [he understands] that his great efforts to free himself from the water were mistaken.
Nirvāṇa is just like that example.”

大八木：誤りがない者は入ることが無い者である。『十地〔経〕』に、

「その故に、第八地において不生の法について承認 (不生法忍) を得る時、夢で水に流され、〔その〕

は、「顛倒 (viparyāsa)」、すなわち、自己の愚昧 (*saṃmoha³²) のあり方から、「超越している (atīkrānta)」、すなわち、しっかりと去っている、[そのような彼が、]「顛倒を超越した者 (viparyāsātīkrānta)」である³³。

付：ヴィマラミトラの『七百頌般若注』について

本稿脱稿後、大八木 2020ab に気付いた。『七百頌般若』やそのヴィマラミトラ注 (SPT/SPT-V) に関する情報などが挙げられている。その中では SPT の初めのほうの部分に出る Abhisamayālamkāra (AA) からの 2 偈の引用箇所— PHT にも引かれるもの— について、3 書のテキストと訳と比較考察が提示されている (2020a: 11-13, 2020b: 6-7) が、その翻訳や考察の結果は筆者とはいささか異なるようである。

PHT 冒頭部を取り上げた筆者の拙稿 2019a では AA のテキストは提示したものの SPT については対応箇所のロケーションのみを記していたので、以下ではまず SPT に対するのテキストと、PHT、AA のテキストならびに筆者の訳とコメントを挙げておく (詳細は拙稿を参照)。

PHT:

de skad du mgon po byams pa/

夢の人が目覚めた時に水から逃れたのにびしょ濡れであることは誤りの譬えであり、それはまさに彼の涅槃である」(104)

Lopez 氏は無言であるが、引用符(“”)の位置からすれば、全体を引用とみているようである。大八木氏は、「このセンテンスそのものは『十地経』にはない。取意か。」と指摘している (fn.82)。翻訳は Lopez 訳よりも大幅に後退しているものの、その方向性のみは首肯できる。実際は、この箇所は、前半は DBh の以下の箇所からの趣意であり、他方、最後の一文は直接的な引用である。

この箇所についての Lopez 氏の理解はさほど外れていないが、本稿で扱った箇所全体を通して明らかとなったヴィマラミトラの『心経』の解釈との関連でいえば、以下の通り。

菩薩 (bodhi-sattva) は菩提 (bodhi) への意向 (sattva) を持つ者として、般若波羅蜜に依拠して菩提を目指し、『解深密経』の説くような菩薩の階梯を登ってゆくのであるが、結果的には般若波羅蜜においても無上正等覚においてもいかなる法も認識されない。すなわち、無上正等覚において何かを得られるというわけではないのである。では菩薩は何のために般若波羅蜜に依拠して住するのか？それは、心の障碍 (= 『解深密経』の説くような一連の所対治)、顛倒や顛倒による恐れをなくするためである。般若波羅蜜以外に住している者には顛倒があるので、その顛倒によって恐れ、夢の中であがくような無益な活動をするのだが、般若波羅蜜に住する者 (菩薩) にはそのような顛倒がなくなり、無益な活動をしなくなるのであり、それこそが涅槃であり、それが般若波羅蜜に住する目的である。

これは中観派としての面目躍如たるヴィマラミトラの『心経』理解である。

DBh, R64(C), K135.3-6: tadyathāpi nāma bho jinaputra (jinaputra) K; jinaputrāḥ R) puruṣaḥ svapnāṃtaragato (svapnāṃtaragato) K; suptaḥ svapnāntaragato R) mahāghaṣṭāpāṃtān ātmānaṃ saṃjñānīte/ sa tatra mahad vyāyāmautsukyam ārabhetottaraṇāya/ sa tenaiva mahatā vyāyāmautsukyena vibudhyeta/ samanantaravibuddhaś (samanantaravibuddhaś) R; samanantaram vibuddhaś K) ca sarvavyāyāmautsukyam apagato (sarvavyāyāmautsukyam apagato) K; vyāyāmautsukyabhayāpagato R) bhavet/

DBh, R66(K), K137.5: tad evāśya parinirvānaṃ bhavet

32 rmongs pa: shin tu rmongs pa とはいないが、『解深密経』の saṃmoha のことを指しているのは明らかなので、saṃmoha を想定した。あるいは直前の rang gi, *sva- は *sam- の誤訳か？

33 Lopez, 65: Here also, to abide in the perfection of wisdom is to pass beyond error, whatever one's obscuration is; completely gone [means] passed beyond error.

大八木: ここでまた般若波羅蜜にとどまる者は、自身の愚かさである誤りを正に超えた者であり、よく行った者は誤りを超えた者である。(104)

先行訳は、経文との対応をほぼ完全に見失っている。

sangs rgyas rnams la lhag par byas//
de la dge ba'i rtsa ba bskyed//
dge bshes mgon dang bcas rnams ni (ni] D; kyis PT)//
'di nyan pa yi (pa yi] DP: pa'i T (unmetr.)) ^[T3] snod du 'gyur//
sangs rgyas bsnyen bkur yang (yang] PT; mang D) dag zhus//
sbyin dang tshul khriims sogs spyad pas//
len dang 'dzin pa la sogs pa'i//
snod nyid du ni mkhas pas shes//

AA:

kṛtādhikārā buddheṣu teṣūpta-śubhamūlakāḥ |
mitraiḥ sanāthāḥ kalyāṇair asyāḥ śravanabhājanam || (AA, 4.6)
buddhopāsanasampraśnadānaśīlādicaryayā |
udgrahadhāraṇādīnām bhājanatvaṃ satām matam || (AA, 4.7)

SPT:

de ni bcom ldan 'das mgon po byams pas kyang bstan te/
sangs rgyas rnams la bya ba byas pa dang//
de dag rnams la dge ba'i rtsa ba bskrun//
dge ba'i bshes gnyen dag gi* mgon bcas ni//
'di dag nyan pa'i snod du 'gyur ba yin//
sangs rgyas rnams lam snyen bkur kun tu 'dri//
sbyin dang tshul khriims la sogs spyod pa* ni//
kun tu 'dzin dang 'chang ba la sogs pa'i//
snod nyid dam pa de dag yin par dgongs//

大八木氏は上記の SPT のテキストに基づき、「SPT-V (= SPT) では『sangs rgyas lam snyen bkur (諸仏の道に親近し)』とあるが、AA では『buddhopāśana』と単数形で『道』に相当する語はなく、PHT でも『sangs rgyas bsnyen』とやはり単数で『道』はない」という。しかし、これは誤り。PHT と AA の記述のみから即座に予想されるように、P, D, 『中華大藏經』には、実際は、sangs rgyas la bsnyen bkur とある (P が読みにくいのは確かであるが、それでもなお snyen の前にツェックはないことは見て取れる。また、カラーสキャンを見れば明瞭に la bsnyen とある。さらには氏の文献リストに挙げられているので氏も当然見ていたはずの D と『中華大藏經』も極めて明瞭)。要するに、lam というのは氏によるチベット文字の読み間違いであり、3 テキストの読みは一致しているのである。

また、最後部の snod nyid dam pa de dag yin par dgongs// を、氏は「器たるものは彼ら勝れた者である」と訳し、「やや文意が異なっている」という (2020a: 13, 2020b:

7)。しかし、文意が異なると指摘することで一体何が言いたいのであろうか。他方、筆者の理解によれば、PHT: *snod nyid du ni mkhas pas shes* と SPT: *snod nyid dam pa de dag yin par dgongs* は、直訳体でややぎこちないものの、いずれも AA: *bhājanatvaṃ satāṃ matam* の翻訳とみなしうる。

翻訳チベット語を読むというのは、チベット語の初等文法の知識をもってチベット語から日本語に単語を置き換えてそのあとは勝手気ままに文意を構想分別するというのではなく、基礎的な文献学的手続きを経た上でその背後にあるインドの著者の考えを理解しようという試みである。ゆえに単語を置き換えることのみを行って SPT と AA や PHT で文意が「異なっている」と指摘することは無意味であり、ましてや自身のチベット文字の読解の誤りをインドの著者に投影するという事は不可。

ただ、*をつけた二か所がおかしなことは確かである。とすれば、伝承の過程でのよくある誤写とみなし、それぞれに *s* をつけて *Inst* にしてやれば文意は通じ、AA、PHT と同様な意味になる（なお、大八木氏が指摘するように、AA, 4.6 の *pāda d* の *asyāḥ* (単数形) が PHT の *'di* とは異なり SPT では *'di dag* と複数形で訳されていることは確かである。しかし、拙稿 2019b では AA では単数形なのが PHT では複数形で訳されているという例を指摘しておいた (n.15)。その箇所も AA からの引用であり本箇所と同様に当然偈頌であったことを考え合わせれば、なおもヴィマラミトラの著作や翻訳チベット語文献に関する網羅的な用例の収集が必要であろうが、*dag* や *rnams* が偈頌の翻訳の際の一種の埋め草として用いられているという可能性を提起しておきたい。いずれにせよ、この場合も原典との関連から単数形で訳せばよい)。

要するに、筆者の理解ではヴィマラミトラが見ていた AA の原文は現行の梵本と同じであり、それに対する理解は適切なものでありかつ SPH と PHT で一貫していたということであり、ゆえに上記 3 テキストの翻訳は、拙稿で提示した以下の一つの訳で事足りることとなる。

「諸仏に供養し、彼〔ら〕(諸仏)に善根を植え、善友(善知識)たちによって*守護者を有する者たちが、これを聞く器となる。

仏への親近、質問、布施・〔持〕戒などという行によって、〔人には教法の〕把握と受持などの器たることがある〔と、〕賢者たちは考える」

*: 善友(善知識)たちによって“守護者を有する”こととなった者たち、あるいは、善友(善知識)たちという守護者を有する者たちということ。

むろん、同一著者(この場合はヴィマラミトラ)の著作(この場合は PHT と SPT)であっても引用に際して違った原典・原文を引用するということはある。ただ、そう考えるならば、原文(この場合は AA)がどのように異なっていた可能性があるのかという点を具体的に明示すべきなのである。

次に、その他の箇所でも面白い例を一つだけ挙げておく。

SPT(D Ma 17b4-5):

nyi khri lnga stong par ni rgyas par bstan la/ 'dir ni mdor bstan te/ tshig nyung yang don mang
ba yin no// de ltar bstan pa'i dgongs pa ni 'di yin te/ sems can dpag tu med pa la dmigs pa'i
byang chub kyi sems dang/ tshad med pa la sogs pa rgyu nam mkha' bzhin pa las sangs rgyas
kyi chos 'bras bur gyur pa rnams de tsam kho nar mngon par grub pa yin no zhes shes par bya
ba'i phyir ro//

大八木 2020b: 4: 『二万五千 (頌般若)』は勝者を説いた。この(勝者)について(この)経が説かれた。すなわち、わずかな語句にも多くの意味があるのである。「そのように説いた誓願がこれである。(すなわち) 無量の有情を所縁とする菩提心と、(四) 無量(心)等、虚空のような因からブツダの法が果となることなど、それのみにように成立したものである」というためである。

氏は上記を「『二万五千頌般若』として引用されている文」として挙げている (n.22) が、チベット語と前後の文脈をよく読めば明らかのように、上記の“”の箇所は『二万五千頌般若』の引用でもなく「趣意」ですらなく、『七百頌般若』に対するヴィマラミトラの解説なのである。詳細は省くが、ここでヴィマラミトラは『七百頌般若』で文殊が *kiyantah sattvā* という問いに対して *yāvanta eva buddhadharmā* と答えたのみで“虚空のごとく無量だ”とは答えなかったことに対する説明をしているのである。かくして、筆者の訳は以下の通り。

代案: 『二万五千 [頌般若]』では〔有情が虚空のごとく無量であることは〕詳細に説かれているが、ここ (= 『七百頌般若』) では簡略に説かれているのである。すなわち、〔『七百頌般若』は〕語句は少なくとも意味は多い。そのように説いた意図は以下である。すなわち、“無量なる有情を認識対象とする菩提心や〔四〕無量などという虚空のごとき原因から、結果である諸仏法 (*buddhadharma*、仏陀の諸特性) がまさにそれだけの分量のもの (無量なるもの) として成立している”と知らしめるためである。

ちなみに、同類のもので、校正の段階で気づいたものに、木村 2019 がある。これも北京版のみを提示しており、テキストや訳に極めて多くの誤りが見られるのであるが、甚だしい例を二つ (「>」以下がデルゲ版 (D) と筆者の代案の提示。文献名や関連研究は挙げる必要はなかろう。以下の理解は氏の北京版のテキストのみを見て想到し D によって確認しただけのことだからである)。

(1a) p. 91: *dgos pa bsal(read.gsal) bar bya ba'i phyir*; p. 90: 必要性は、明らかだからである。
> *dogs pa bsal bar bya ba'i phyir*(D cu 15a6); 疑いを取り除くために; (1b) p. 92: *dogs pa bsal(read.gsal) bar bya ba'i phyir*; p. 91: 必要性は、明らかだからである > *dogs pa bsal ba'i*

phyir(D tho 22a2(= P tho 27a3!)); 疑いを取り除くために (類似表現として、Cf. p. 89: etad āsānkā nivṛṭty artham; 同 : dogs pa de zlog pa'i phyir. なお、木村氏のテキストでは āsānkā と nivṛṭty の間には行替えがある。同テキストは、電子データの問題であろうか、行替えの際に単語が区切れる場合があるようなので、氏はそこはコンパウンドとみていたと好意的にとってもよいが、いずれにせよここは無論、etadāsānkānivṛṭtyartham とすべてコンパウンドである。ちなみに、常識的にいって、dgos pa gsal bar bya ba'i phyir というチベット語を訳すなら、「必要性を明らかにするために」となる。逆に、「必要性は、明らかだからである」という日本語を上記の表現を活かしてチベット語にするとすれば、*dgos pa ni gsal ba yin pa'i phyir ro あたりとなる。)

(2) p. 91, 92: smos nas shes pas; p. 90, 91: 述べ知るのだから > smon nas shes pas(D cu 15a7); smos(sic., read smon) nas shes pas(D tho 22a3); 願智 (*prañidhijñāna) によって

テンギュルに関しては北京版とデルゲ版をきちんと参照するということがらひは、せめてこの分野の最低限の常識として確立されてほしいものである。

略号

Acta Asiatica 121: *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture, 121, The Heart Sūtra Revisited: The frontier of Prajñāpāramitāhṛdaya Studies*. Tokyo: The Tōhō Gakkai, 2021.

BK: *Bhāvanākrama*.

DBh: *Daśabhūmikasūtra*. 『十地経』. K: R. Kondo ed., *Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram*. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983.; R: J. Rahder ed., *Daśabhūmikasūtra et Bodhisattvabhūmi. Chapitres Vihāra et Bhūmi*. Paris: Paul Guethner, 1923.

MVA (『大日経』), *Mahā-Vairocanābhisambodhi*: D no. 494, P no. 126.; 『大毘盧遮那成佛神變加持経』 T no. 848.

Lopez: *Elaborations on Emptiness: Uses of the Heart Sutra*, Donald. S. Lopez, Jr., Princeton: Princeton University Press, 1996.

PHT: Vimalamitra (tr. Vimalamitra, Nam mkha', Ye shes snying po), '*phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i rgya cher bshad pa* (**Āryaprajñāpāramitāhṛdayaṭīkā*). D no. 3818; P no. 5217; T (TBRC Core Text Collection 7, TBRC Resource ID: W23159 (<https://www.tbrc.org/#!rid=W23159>), Bir, Himachal Pradesh: D. Tsondu Senghe, 1979., 33p.; 8x44cm).

PV: *Pramāṇavārttika*.

Rim gyis: Vimalamitra (tr. Prajñāvarma, Ye shes sde), *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don*. D no. 3938, P no. 5334.

SNS: *Samdhinirmocanasūtra*. É Lamotte ed., *Samdhinirmocanasūtra: L'explication des Mystères*. Louvain: Université de Louvain, 1935.; 『解深密経』 T no. 676. 玄奘訳。

大八木：大八木隆祥「ヴィマラミトラ 般若心経広大註」『集成』69-122.

『集成』：『般若心経註釈集成〈インド・チベット編〉』渡辺章悟・高橋尚夫編、起心書房、2016。

談等：谈锡永 刘卓衡译「圣般若波罗蜜多心经广释（无垢友尊者造）」。In: 谈锡永等著译『心经内义与究竟义』华夏出版社 2005（2010 再版），52-84.

SR (『三昧王経』) : *Samādhirājasūtra*. see Dutt 1941.

TSD: Lokesh Chandra, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. Kyoto: Rinsen Book Company, 1976.

SPT: Vimalamitra (tr. φ), '*phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bdun brgya pa'i rgya cher 'grel pa*

(*Ārya-Saptaśatikāprajñāpāramitāṭīkā*), D no. 3814 (ma 6b1-89a7), P no. 5214.

参考文献

Attwood, Jayarava

[2018] “A note on *Niṣṭhānirvāṇaḥ* in the Sanskrit *Heart Sūtra*”, IOCBS. 2018(14): 12-19.

Conze, Edward

[1967] “The *Prajñāpāramitā-hṛdaya Sūtra*”, In: *Thirty Years of Buddhist Studies: Selected Essays*, London: Bruno Cassirer, 148-167.

Dutt, N.

[1941] *Gilgit Manuscripts, Vol. II. part 1*. Srinagar-Kashmir, 1941.

Gruber, Joel

[2016] “The Sudden and Gradual Sūtric (and Tantric?) Approaches in the Rim gyis 'jug pa and Cig car 'jug pa”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 39, 405-427.

Harimoto Kengo

[2021] ““Be!/Wake up!”: On Bodhi in the Mantra of the *Prajñāpāramitāhṛdaya*”. *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 37, 1-33.

Pecchia, Cristina

[2010] “Contradictions on the Way to Liberation: Dharmakīrti's solutions”, *Buddhist Asia 2. Papers from the Second Conference of Buddhist Studies held in Naples in June 2004. Edited by Giacomella Orofino and Silvio Vita. Italian School of East Asian Studies*, Kyoto 2010: 47-67.

Saito Akira

[2021] “Avalokiteśvara in the *Prajñāpāramitāhṛdaya*”, *Acta Asiatica* 121: 1-21.

Silk, Jonathan A.

[1994] *The Heart Sūtra in Tibetan: a critical edition of two recensions contained in the Kanjur*. (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Ht. 34.), Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, 1994.

磯田熙文

[1977] 「bhūmi-sambhāra について— Dharmamitra による—」IBK, 26-1, 350-354.

一郷正道

[2011] 『瑜伽行中観派の修道論の解明—『修習次第』の研究』基盤研究 (C) 成果報告書.

大八木隆祥

[2002] 「Vimalamitra 造『聖般若波羅蜜多心広疏』に見られる『大日経』」『密教文化』208, (21) - (39).

[2020a] 「『七百頌般若』 Vimalamitra 註について」『豊山教学大会紀要』48, 1-22 ((214) - (193)).

[2020b] 「Vimalamitra 著『七百頌般若疏』 I の引用文献について」『豊山教学大会紀要』49, 1-14, ((224) - (211)).

木村誠司

[2019] 「アビダルマ仏説論について—インド撰述3大『俱舍論』注を中心として—」『駒澤大學佛教學部論集』50, 85-98(L).

木村俊彦

[1981] 『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究〔付・ダルモータラ釈『ニヤヤ・ビンドウ』和訳』東京：木耳社.

白石(藤田)真道

[1939 (1988)] 「広本般若心経の研究」『密教研究』70, 1-32 (『白石真道仏教学論文集』499-530 (再録))。

原田和宗

[2010] 『『般若心経』成立史論—大乘仏教と密教の交差路』東京：大蔵出版.

堀内俊郎 (Horiuchi Toshio)

- [2018] 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注 (3)—」 *Acta Tibetica et Buddhica* 11: 99-121.
- [2019a] 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注 (1)—」 『東洋学研究』 56, 165-195.
- [2019b] 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注 (2)—」 『国際哲学研究』 8, 167-187.
- [2019c] 「ゴク・ロデンシェーラプ著『『般若心経』の広大注』の解説』校訂テキストと訳注」 *Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies* 2 (2019): 107-140
- [2020] 「翻訳チベット語文献・漢訳仏典読解への方法論的反省—『般若心経』注釈書と『要義釈論』を例として—」 『東洋学研究』 57, 189-208.
- [2021a] 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラの「八様相」解釈—」 『東洋学研究』 58, 187-208.
- [2021b] “Revisiting the “Indian” Commentaries on the *Prajñāpāramitāhṛdaya*: Vimalamitra's Interpretation of the “Eight Aspects””, *Acta Asiatica* 121: 53-81.

松田和信

- [1995] 「『解深密経』における菩薩十地の梵文資料『瑜伽論』『撰決択分』のカトマンドゥ断片より」 『佛教大学総合研究所紀要』 2, 59-77.

宮坂宥洪

- [2004] 『真釈 般若心経』 東京：角川学芸出版.

米澤嘉康

- [2009] 『全注・全訳般若心経事典』 東京：鈴木出版.

渡辺章悟

- [2009] 『般若心経—テキスト・思想・文化』 東京：大法輪閣.

*本研究はJSPS KAKENHI (16K16697) の助成を受けたものである。

キーワード：ヴィマラミトラ、『般若心経』、菩薩、無所得、般若波羅蜜